

SATOYAMAUMI プロジェクト

ユース海外インターンシッププログラム活動報告書

酪農学園大学農食環境学群環境共生学類 3 年 高原実那子

派遣国：カンボジア

プロジェクト名：オオヅル保全に向けた小中学校での環境教育

受け入れ団体：Mlup Baitong (JEEF)

派遣期間：2020 年 2 月 2 日～2020 年 2 月 26 日

1. 目的

私がこのプログラムに参加した目的は主に 2 つある。

1 つ目は、地域の人々や生き物のためになる活動を理解し、実践することだ。このインターンシップでできるだけ地域コミュニティに深く関わることで、現場で必要とされていることを把握し、実践してみたかった。また、現地で活動している NGO が、どのような強みや課題を持ち、どのように地域に貢献しているのか知りたいと思っていた。

2 つ目は、環境保全への関わり方に関して、視野を広げる事だ。今後私が様々なコミュニティと関わっていく上で、地域の外からの視点を持って、その地域の環境保全活動に貢献するためにはどのようなことができるのか、どのような力が必要なのか学びたいと考えていた。

現在、私は大学で野生動物の保護管理について学んでいる。環境保全活動を自分自身が行ったり、様々な取り組みに関わる人に話を聞いたりする中で、環境保全活動を継続していくことの難しさを感じていた。そして、地域ごとにそれぞれの事情があるため、活動を継続していくためには、野生動物との問題が実際に起こっている地域の人々にとって、メリットになるような仕組みが大切ではないかと思うようになった。このインターンシップを通じて、私なりに環境保全活動を継続していくことについて考えを深めたいと思い、この 2 つの目的を決めた。

2. 活動場所

カンボジアの中でもメコン川沿いにある、カンポット州 Anlung Pring（以下 AP）周辺の村で活動していた。AP は雨季には氾濫によって完全に水に覆われ、乾季には湿地になり、様々な渡り鳥のにとって重要な生息地となる。カンポット州は、この湿地をエコツーリズムにも活用していきたいと考えている。乾季になると、カンボジアの北部から AP にオオヅルが飛来する。オオヅルは IUCN の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているツルで、AP ではエビの養殖や廃棄物等による水質の悪化、農薬などが、オオヅルの減少原因として心配されている。

この村での生活用水は、雨季の期間に貯め雨水を使用している。飲料水は、市販されて

いるペットボトルを購入し利用している家庭が多いようである。コミュニティのゴミは、道端や川などに放棄されるか、庭などで燃やして処理される。日常生活にプラスチック用品はあふれているが、処理の仕方は人々の健康と環境（おそらく観光業にも）に悪影響を与えている状況だ。そのため、インターン先である Mlup Baitong は、コミュニティ内の 9 つの小中学校を支援している。学校環境を整備するとともに、ガイドブックを使用した環境教育を行ってくれるように働きかけている。村には Mlup Baitong のスタッフである Hoch さんが中心となって、先生方との交渉や、学校でのゴミ拾いイベントの運営などを行っている。



写真 2 AP で実際に観察したオオヅル



写真 1 塩田と散乱したゴミ

3. 活動内容

以下の活動を行った。

環境教育

4 つの学校で、湿地とオオヅルに関する授業をそれぞれ 4 回ずつ行った。

英語教育

放課後の補講と、先生が不在の場合のクラス授業を行った。

その他の活動

- ・ 湿地セレモニーの参加
- ・ ゴミ拾いイベントの参加
- ・ Mlup Baitong 事務所での報告 など。

この報告書では、環境教育について詳しく説明する。〈環境教育について〉

Mlup Baitong が支援している学校のうち小学校 2 校、中学校 2 校の計 4 校で授業を行った。授業内容は、体験型水教育プログラムのプロジェクト WETなどを参考に作成した。BirdLife International Cambodia Programme が制作した環境教育用のビデオも大変参考になった。また、友人に協力してもらい、教材をクメール語と英語で作成した。

私自身が北海道で暮らしていることもあり、湿地に関する環境教育に力を入れたいと思っていた。北海道は、開発によって多くの湿地を失った地域である。そのため、多くの湿地がまだ残っているカンボジアの人々に、湿地が自分たちの資源だと少しでも再認識するきっかけになればと思った。オオヅルが希少だから守るのではなく、少しでも湿地が面白いもの、自分たちにとっても有益で興味深いものであると思ってもらえればと思っていた。

AP でエコツーリズムをしている方や、Hoch さんの話、生徒の様子をふまえて修正し、結果的に以下の 4 つの授業を実施した。

① 生き物に大切な、4 つのものって何だろう？

食料、水、隠れ家、活動場所、という 4 つの要素がすべての生き物にも必要であることを説明した後、体を動かすアクティビティを行い、理解を深めてもらった。具体的な手順は以下のとおりである。

1. 生徒がオオヅルと 4 つの要素のグループ（計 5 グループ）に分かれる。
2. グループごとに色わけされたテープを生徒全員が手に貼る。
3. オオヅルグループの生徒は 4 つの要素全ての色のテープを時間内に集めるために、他の 4 つのグループを追いかける。4 つのグループの生徒はオオヅルのグループに捕まらないように逃げる。
4. 教室に戻り、オオヅルグループの生徒が集めたテープの色を確認し、4 種類すべてを集められなかったオオヅルは負け、集められたオオヅルは勝ち。
5. オオヅルだけでなく、人や他の生き物たちと、4 つの要素を分け合っているということを伝える。

② オオヅルは、どのくらい遠くから飛んでくる？

カンボジア全体の地図を使い、オオヅルの繁殖地を探した。また、繁殖地から AP までの距離がどのくらいなのかをメジャーを使って調べた。

③ 渡り鳥は大変！

渡り鳥であるオオヅルが直面する様々な問題を体験するアクティビティを行った。具体的な手順は以下のとおりである。

1. 校庭の両端を AP と繁殖地と仮定し、紙版を生息地としておく。
2. 生徒はオオヅルになりきって、乾季と雨季が切り替わるタイミングで、AP と繁殖地を交互に移動する。紙版に足が載っていなければ生息地たどり着けなかったことを意味するため負けとなる。
3. 季節が切り替わるごとに、様々なハプニング（農薬やゴミによる水質の悪化、エビ養

殖場の増加、他の鳥を狙った罠による怪我など）が起こる。

4. ゲームが進むごとに生息地である紙版が減少する。最後まで生き残ったオオヅルの勝ち。
5. 教室に戻り、どんな問題がゲーム中に起きたのか振り返る。また、どの問題は人が解決することができそうかを話し合う。

④ 1度壊したものを、元に戻すには…？

5、6 人のグループに分かれ、初めは単純で身近なキャラクターが描かれたパズルを完成させる。次に、複雑な風景写真を使ったパズルを組み立てる。（複雑なため、時間内に完成させるのは難しい。）複雑なものは一度壊すと回復させるのが難しく時間がかかること、自然環境にも同じことが言えることを伝えた。また、北海道の過去と現在の湿地の大きさを比較したり、コミュニティの衛生写真を観察し、保護区や自分たちの学校を探した。



図 1 ①で使用した教材



写真 3 ①の授業風景



写真 4 ②の授業風景

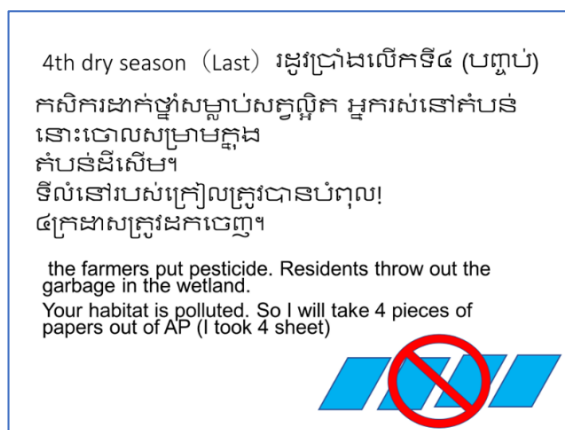


図 2 ③で使用した教材



写真 5 ③の授業風景



写真 6 ④の授業風景

授業中は、学校の英語の先生と Mlup Baitong の Hoch さんにたくさん協力して頂いた。授業ではいろいろな事が起こり、初めは戸惑いもあったが徐々に対応するのが楽しくなった。同じクラスでも日によって人数が 20 人から 40 人以上になっていたことや、(親の手伝いなどで学校に来ないことも多い。) 授業をする場所が学校ではなく、マンゴーが沢山植えられた庭だったこともあった。予定通りに進むことがほとんどないからこそ、様々な場合を想定し授業をして、うまくいかなくても気にしすぎず、次の授業で改善するというサイクルが面白かった。

カンボジアの子どもたちは本当によく働く。小学生の時から、赤ちゃんのお世話、お店に来るお客さんの対応、料理、洗濯、掃除、いろいろなことをこなす。子どもでも立派な働き手だ。そんなカンボジアの子どもたちに環境教育を行うということは、日本でいう環境教育よりも、子どもたち自身が理解し納得すれば生活習慣を変えやすく、将来につながるという点において、影響が大きいかもしれないと思った。



写真 7 マンゴーが植えられた庭での授業



写真 8 ホームステイ先の女の子が洗濯をしている様子

4. まとめ

目的の1つ目である、必要とされている事を把握し、実践するというのは達成できたかどうかは分からない。必要とされていることではなく、自分の知ってほしいことを押し付けてしまうのではないかという不安は派遣前から感じていた。交流のあった人の多くが、オオヅルの減少やごみの問題を重視していない様子だったため、コミュニティに必要なことは何なのか分からなくなってしまった。しかし、体験型の教育プログラムは、環境教育だけでなく学校の授業全体で行われていないため、実施できて良かったと思っている。生徒たちは興味をもって楽しそうにアクティビティに参加してくれ、作成した教材を使ってみたいと持ち帰ってくれた先生もいた。今回の授業が少しでも刺激になり、将来的に先生方に取り入れてもらえたらと思った。

また、現地のNGOの活動の強みや課題も間近で見ることができた。Mlup Baitongの活動は、環境だけでなく、衛生環境や、教育の質の向上にも影響を与えられる活動だった。Hochさんはどの学校の先生にも気さくに話しかけ、地域の人から信頼を得ているようだった。様々な社会問題に同時に貢献できる活動だからこそ、地域の人を巻きこんで活動できているのだと思う。一方で、活動を継続していくことの難しさも感じた。活動を継続していくためには活動資金を得る必要があるが、環境教育は十分な収入が得られる活動ではない。また、コミュニティの人が自発的に行うには、啓発活動にまだ時間がかかるように感じた。

目的の2つ目である環境保全の関わりについて視野を広げるということについては、たくさん学びを得ることが出来た。私はAPのように人と自然環境が密接に関わる地域で、豊かな環境がこれからも残ってほしいと思う。村での暮らしは便利ではないけれど、お金では測れない豊かさと幸せがあり、とても素敵だと思ったからというものもあるが、自己中心的な理由もある。それは、私たちの暮らしが、このような環境に依存していることを分かっているからだ。しかし、お世話になった村の人たちに、「きれいな水を飲むために、経済的に豊かな暮らしをするために、みんなが望むだけ勉強するために、自然環境を壊さないといけない。」と言われたら、私の生活が成り立たなくなるのでやめてくれとは言えない。私が便利な暮らしをしているのは、私より前に生まれた人たちが便利な暮らしを作ったからなのだから、カンボジアの人がそれを望んではいけないはずはない。

それでも豊かな自然環境を守ってもらうために私ができることは2つあると思った。1つ目はMlup BaitongのHochさんのような、自分たちの自然環境を大切にしたい人々が活動を継続できるように様々な形で支援していくこと。2つ目は「環境に負担が小さい＝経済的ではない。」という現状を変えるために努力すること。今回のインターンで、外からきた私のような立場であっても微力ながら役に立てることを実感できた。このインターンでの経験を糧に、私の立場でこの2つのためにできることを、今後も模索し、全力でやりたいと思う。

最後に、今回このような貴重な経験をさせてくださった SATO YAMA UMI プロジェクトの皆様、JEEF の皆様、Mlup Baitong の皆様に感謝申し上げます。村の方々が私たちを快く受け入れ、温かく接してくださったのも、今まで村で活動してきた Mlup Baitong の方や、SATO YAMA UMI プロジェクトに関わる方々への信頼の土台があったからだと思います。本当にありがとうございました。



写真 9 一緒に活動した花嶋さんの授業の様子。彼女の人柄や授業から、たくさん刺激を受けた。



写真 10 たくさんお世話になったホストファミリーと、Hoch さん、学校の先生